
魔法の世界で守る者

妄想野郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法の世界で守る者

【Nコード】

N0525BA

【作者名】

妄想野郎

【あらすじ】

一人の男が始めた戦争に終止符を打つために追い続けた男たちがいた。彼らはただひたすら追い続けた。そして、ほとんどの男たちが倒れ残ったのは老兵だけだった。（この作品は作者の妄想から始まったのでお見苦しい点があるかもしれませんが、ご理解をお願いします。）

終わりと始まり（前書き）

すべてを終えた老兵の前に現れたのは・・・

終わりと始まり

そこは海に面したホテルの最上階でレストランになっている。しかし、店内には客はおらず、壁に銃痕がたくさんあり、銃を握ったまま倒れている者が多数いる。電球の明かりは一切なく、月明かりと屋上で燃えているヘリの明かりがレストランの中央にある天井の大きな窓から入り辺りを照らしている。

そこには一人の屈強な老兵がガラスが散らばる床に座り壁に背を預けながら葉巻に火を付けていた。

「ふうー・・・」

吸い込んだ葉巻の煙りを天井を見つめながら吐く。

吐いた煙りがゆっくり昇るのを見ていた視線を正面に向ける。

その視線の先には天井の窓から垂れたケーブルがありケーブルの先には一人の男が月の明かりを受けながら首を釣って死んでいる。その男を見ながら老兵は五年前の事を思い出す。五年前のあの時、この男の属する組織のリーダーを殺すためにほとんどの部下を失ってしまった。結果は殺すことが出来たが、殺つたのは老兵では無く一人生き残った部下だった。

それから五年間、老兵は姿を見せず戦死したとおもわれていた。だが世界がまた老兵を戦場へと引きずり出した。矯正収容所にいたところをかつての部下によって救出され脱出し、部下の所属するチームの一員になった。

その時世界は目の前の男が起こしたテロによって崩壊の危機にあった。大国と大国が戦争状態におちいり世界を巻き込んだ三回目の

戦争が始まるうとしていた。

チームは、影からこの戦争を操るこの男を追いかけていたところ、二つの隠れ家を発見する。チームは老兵と部下を主力するチームと、部下が訓練官として指導した奴と常にサングラスと頭蓋骨を模したバラクラバを付けた奴を主力するチームの二つに分かれた。

どちらも目的の奴はいなかったが頭蓋骨のチームは男に関するデータを手に入れるも味方によって殺されてしまう。老兵のチームも味方の襲撃を受けるが協力者によって逃げることに成功するも生き残ったのは老兵と部下だけだった。

老兵とその部下は、裏切った奴に復讐とチームの仇を討つためにたった二人で敵の基地に潜入する。

そして、熾烈な死闘の末に勝つことができたが、その最中に部下が胸をナイフで刺されてしまい致命傷を負ってしまう。

老兵は迎えに来た協力者を使い傷ついた部下と共に基地から脱出する。逃げ込んだ先で部下の治療をしてる最中に敵の襲撃を受けてしまった。そこから脱出する時に老兵は体の至るところに入れ墨を入れた男を仲間にする。

それから二ヶ月ほどたった時、ヨーロッパはロシアの侵攻に遭ってしまふ。そして、この侵攻の裏にはこの男が操っていたのだ。それを知った老兵と2人の仲間は奔走する。そして、とあるホテルに男が来る情報を手に入れた3人は奇襲しようとする。

三人は老兵と二人の二つに別れ、老兵は単身でホテルに潜入する。

それを広場を挟んだ所にある教会の塔から見張りをして男が来るのを息を潜めていた。

そして、ホテルに男が来たのを確認して見張りのふたりがテラスにいた兵士を狙撃して老兵がその隙に部屋に突入するが部屋にいるのは数人の兵士だけで男はいなかった。老兵はこれが罠と瞬時に理解して逃げようとした瞬間部屋が爆発する。

それを教会の塔から見ていた二人は無線で呼ぼうとするが応答がなく、移動しようとした時に部下が仲間と共に教会の屋根に転げ落ちる。仲間が驚いて部下を見た刹那自分たちがいた塔が爆発した。しかし屋根はすぐに切れてしまいそのままダイブしてしまうが、運よく工事用の足場があり木の板を突き破り、落下の勢いを減らしながら落ちてゆく。

背中から地面にぶつかたが意識は朦朧だがなんとかあるので頭を動かして部下を探す、部下は瓦礫の下敷きにされておりピクリとも動かない。近くでは敵の銃声が聞こえる。近づいてくる姿があるので敵と判断するも体が動かず諦めようと思った時、近づいてきたのはさつきホテルで爆発に巻き込まれた老兵であった。

老兵は仲間と共に負傷した部下を守りながら銃弾の雨が降り注ぐ街の中から撤退していく。

しかし、傷口からの出血が激しく部下は息を引きとった。

そして、老兵は愛用していた拳銃を部下の胸に置いて小さな声で「すまない」といった。

同時に老兵は決意する。

あの男を必ず殺すと。

男がこのホテルのレストランに在ることを知り、老兵は仲間と共に正面から乗り込んで行く。

敵の抵抗が激しいが何とかレストランまで来たが、仲間が敵のヘリからの攻撃で負傷し倒れてしまった。しかし老兵は立ち止まらない。ここまで来るのに犠牲になった者たちのためにも、ここで止まる訳にはいかないから。

あの男がヘリで逃げようとしたところを、飛び乗りパイロットと護衛を殺すが護衛が撃った弾が操縦席に当たり操縦が出来なくなつてしまいビルの屋上に墜落する。

墜落した時に屋上に放り出された老兵がうつ伏せた状態で見ただの床のガラスに写る自分で顔を上げ見たのは、燃え盛るヘリから出てくる男と間に転がっている拳銃だった。老兵は這うように進んでつかもつと瞬間、拳銃を取られてしまう。

男に銃口を向けられた老兵は自分が殺されること以外なにも感じずただ死を受け入れようとした。しかし、男が引き金を引こうとした刹那、銃声が聞こえたと同時に男の血が舞う。

音のほうを向くとさっき倒れたはずの仲間が拳銃を撃ちながら近づいている。老兵は終わったと思ったが男が仲間に数発撃った内の一発が仲間の眉間に当たつてしまふ。倒れてゆく仲間を見ていた老兵は怒りに燃え男に襲いかかる。

ガラスの床に押し倒した男の首を両手で渾身の力で握る。男は両手を外そうと抵抗するが、外れずかえつて力を使いだんだんと力が入らなくなつてゆく。その間にガラスに亀裂が広がつてゆく。

男の力が抜けた隙を突いて、燃え盛るヘリから伸びていたケーブル手に取り首に巻きつける。そして、男のスーツの襟を掴み上体を持ち上げガラスにたたきつけて一緒に落ちて逝く。

男を見ていた視線をガラスが散らばる床に落とす。

そこには、老兵を中心にして血の池が広がりガラスの破片を飲みこんで行く。外ではパトカーの音が近づいている。

老兵は目をつぶり小さく呟く。

「終わったな・・・」と

そして、葉巻を持っていた腕が糸が切れたように床に落ちる。葉巻はそのまま血の池に落ちて灯が消えて逝く。

頬に温かい風が撫でる。

目をゆっくり開けるとそこはさっきのレストランだった。

(?・・・)

しかし何かがおかしいと感じはするもわからない。首を少し傾げて考えるのも思いつくことは何もない。

すると、天井の窓から光る球が降りてきた。

考えることを忘れ凝視していると体の正面に降りてきて手を伸ばせば届く位置まで来た。

大きさはだいたいソフトボールぐらいはあるだろう光る球はゆら

ゆらと揺れている。

「誰だ？」

暫らくして老兵は思いきって光る球に聞いてみた。

「・・・」

「無視か？」

返答がないので威嚇するような声でもう一度聞いてみる。

またも返答がないので老兵は葉巻を吸おうとポケットから葉巻とライターを出して慣れた手つきで葉巻に火をつける。

顔を上げ天井を見つめながら吸い込んだ葉巻の煙を吐きながら思う。

（静かだな・・・・・・ッ！）

老兵の目が一瞬開きすぐに鋭い目になる。そのまま顔を光る球に向け落ち着いた声で問いかける。

「お前が知っていると前提して聞くが、」

「・・・」

「ここは“現実”じゃないな？」

その瞬間、光る球が爆ぜるように大きくなり世界が真っ白になった。

あまりの眩しさに瞳を閉じて腕で顔を隠すが、すぐに光は収まった。

瞳を開け腕をどけるとそこはレストランではなく壁や床、天井がすべて白で塗られた小さな部屋の中だった。

部屋には机とイスが二つありドアが二つあり、ほとんどが白で統一され、ドアの一つが黒色なだけだ。

部屋には老兵だけで他は誰もいない。

老兵は誰もいないことを確認すると机に背を向けて一つのドアに近づきドアノブを触る。

「そっちのドアでいいんかえ？」

誰もいない部屋で後ろから声をかけられ老兵だがドアノブから手を離しゆっくり振り返る。

声の主はイスに座っていて白いカップを持って何やら飲んでいた。

老兵は少し警戒しながらも机に近づき反対側のイスに座る。そして、反対側に座る者をじっくり見る。

見た目はかなりのご高齢に見え、髪の毛と髭はすべて白く髭は首を隠れるほど伸びている。体系は中肉中背といった具合で、服装は足首まで隠れる白いローブを着ている。

「あまり見られるのは好きじゃないんじゃが・・・」

「ああ、すまない」

どうやら結構見ていたみたいだな

「お主に聞きたいことがあるんじゃが、いいかの？」

「ああ。別にどうと言うことはない。こちらでも聞きたいことがあるんでな」

「そうか」

そう言う老人はカップを一口飲んで机に置く。

「なぜあそこが現実じゃないとわかったのじゃ？」

「音だ」

「音？」

老人は眉を顰めながら聞き返す。

「いつから気づいたのじゃ？」

「最初は怪しいと思うぐらいで分からなかったが、こいつで確信したよ」

そう言うのと老兵はズボンのポケットから取り出して机に置く。

老人はそれを見て驚くように眉をあげる。

「ライター？」

「そうだ」

そして、老兵はライターを持って火をつける。

「こいつで葉巻に火をつけた時に静かだったただけだ。それと、その演技はいつまでやるんだ？」

話を聞いた老人は急に表情を崩して温和な表情になる。

「さすがわ特殊部隊の隊長なだけはあるな。騙してわるかった」
そう言うのと老人は頭を下げた。

「気にするな、職業柄気づいただけだ」
それを聞いた老人は頭を上げる。

「ありがとう。ところで隊長殿は何が聞きたいのかな？」

「隊長殿はやめてくれ。聞きたいことはここに來た理由とあのドアについての二つだけだ」

「おおそうじゃった」

忘れていたかのように言った老人は温和な表情が真剣な表情になり老兵も真剣な表情で待ち構える。

「こことは違う世界に行つてある者達に協力してほしいのじゃ」
「違う世界？」

「そうじゃ。別の言葉で異世界とも言ふな」
「パラレルワールドとは違うのか？」

「当たらずとも遠からずじゃな。こことは違う決定的なのが魔法の存在じゃな」

「魔法？ あれか、ファンタジー系の小説によくあるやつか」

「そうじゃ。そして、もう一つあるんじゃよ。」

「なんだ？」

「お主らの仕事道具じゃよ」

「……銃の事か」

「そうじゃ。厳密には質量兵器と呼ばれるがな」

「理由は？」

「それはいずれ知ることだから気にしなくてよい」

「いや、しかし……」

「ドアについてじゃが、話していいかの？」

（このジジイ）

「今無性にお主を殴りたくなつたのじゃが？」

「なんのことだ？」

「……いや、なんでもない」

「そうか、ならドアについて話してくれ」

老兵はそう言つて後ろを振り向く。

「うむ、向かつて左の白いドアが異世界への扉で、右がさっきお主が触つていた黒いドアが死の世界への扉じゃ」

気なる言葉あつたので老人を見る。

「死の世界つてのは？」

「はつきり言えば死んだ時に行く世界じゃな。なんならお主が行つた時どうなるか教えてやろうか？」

「いや、遠慮する。わかる気がするからな。」

自信満々に聞いた老人だが老兵の即答で一気に沈んで行く。

「そうか。なぜわかるんじゃ？」

どこか遠くのものを見るような顔で話す。

「たくさん殺して来たし、死なせてしまったからな、それ相應の世界だろうよ」

二人の間に気まずい空気が漂う。

（どうしようかのお）

老人はこの空気を変えようと考えていたら目の前の老兵がいきなり立ち上がり老人を見つめながら口を開く。

「ようするに白いドアに行けばいいんだろ？」

突然の行動に老人は気の抜けた返事をしてしまう。

「じゃあ、行くか」

老兵はそのまま白いドアの前まで来て老兵は老人に背を向けながら問いかける。

「行くのは俺だけか？」

聞いた老人は優しい声で『大丈夫』と言った。

「頼もしい仲間がたくさん一緒じゃよ。だから安心して行け」

老兵は背を向けながら『そうか』と呟く。

そのままドアノブを握りひねる。開けると猛烈な光が老兵をつつみ連れて行く。

老人はそれをただ見つめていた。

終わりと始まり（後書き）

ご意見・ご感想・改良点ありましたらお願いします。

目覚めと集結（前書き）

第2話始まります。

目覚めと集結

『近いうちに何かが起きる』

真新しい執務室のイスに座り机に肘をついて八神はやて二等陸佐は悩んでいた。

先日、姉のように慕うカリム・グラシアに呼びだされて聖王教会に行ったらさっきの言葉を言われたのだ。

いきなりの事で戸惑いながらも理由を聞くと、カリムのスキルである『予言者の著書』で分かったとのこと。

ロストギア関係かと聞いたが詳細は分からないと言われたので、しばらくは警戒しておく伝えて帰ったのだ。

「はやてさん、大丈夫ですか？」

気がつけば目の前に心配な顔で見つめるリインフォースが机に立っていた。

「ああごめんな、心配かけたみたいやな」

そう言うとはやてはイスの背もたれに寄りかかる。

その様子を見ていたリインフォースははやてに問いかける。

「予言の事ですか？」

はやては何も言わず頷く。

「いつ起こるか分からない予言に悩んでいたら、できるものもできませんよ」

説教するように言われたはやては少し笑いながらリインフォース

を見つめる。

「ふふ、そうやな、悩んでもしかたないな。ありがとうなリイン」
礼を言われたリインフォースは胸を張って腰に手を当てて答える。
「いえいえ、こういうのも仕事のうちですから」

「そうか、ならお仕事ご苦労さん」

「そういえば、今日はなのはさん達と食事でしたね」

「そうや。久しぶりになのはちゃんとフェイトちゃんの3人でお昼にな」

時計を見てリインフォースは確認する。

「ではもうすぐですね」

「そうやな、もう午前の練習も終わってるやろな」

そして、ドアの向こうで話し声が聞こえてきて部屋の前で止まりノックされる。

「はやてちゃん、なのはだけどいいかな？」

「いいで」

ドアが開き高橋なのは一等空尉とフェイト・T・ハラOWN執務官が入ってくる。

「ごめんね、遅くなつて」

そう言つてなのはは顔の前で手を合わせて謝罪する。

「私もごめんね」

フェイトもなのはを真似て手を合わせる。

「気にせんでええよ。それより早くお昼に行こう。うち、おなかと背中がくつつきそうや」

二人は手を降ろしてほほ笑む。

「はやてちゃんらしいね。じゃあ行こうかフェイトちゃん。はや

てちゃんがくつつく前に」

「そうだね、なのは」

そして、三人そろって廊下に出ようとしたとき、床が揺れ置物が小刻みに音を立てる。

「地震だね」となのはが言い、

「うん。けど大きくはないね」とフェイトが相槌を打ち、

「そうやね。シャーリー、そっちは大丈夫かな？」とはやては部下に連絡をする

ディスプレイが現れそこにはひとりの大きめのメガネをかけた女性映っている。

「はい、こちらは大丈夫ですよはやて部隊長。被害も今のところは聞いてませんし大丈夫だと思われます」

「そうか、ならよかった。新設そうそう壊れたら洒落にならんかな。震源地分かる？」

「そうですね、臨海第8空港近隣の廃棄都市で次元震の可能性が高いですね」

報告を受けた三人は引つかかる言葉があつたので聞いてみる。

「あの廃棄都市が震源地って珍しくない？」とフェイトが聞き

「そうだよな。それと次元震自体が珍しいもんね」となのはが相槌を打つ。

「シャーリー、レリックの反応はある？」

「少しお待ちを」

そう言っただイスプレイが消えたと同時にはやてがため息をつく。
「なんもないといいけどな」と願うような声を出すはやてに二人はそつと肩を触り慰める。

「元気出してはやてちゃん」

「そうだよ、諦めたらそこで終わりだよ」

二人からの励ましを受けたはやては気持ちを気持ち直す。

「そうやな、まだ諦める訳にはいかな」

「そうだよ。今日が無理でも今度にすればいいんだから」

フエイトが話しかけたと同時にディスプレイが現れ先ほどの女性
が映っているが緊迫した表情でいた。

「はやて部隊長！」

「どうしたんや!？」

その緊迫した表情を見たはやては状況を理解しようと聞き返す。

「廃棄都市に陸戦型ガジェットの反応多数探知しました！」

「レリックは？」

ガジェットがレリックに反応して集まる習性があるので反応がある
ということはレリックがある可能性が高いのだ。しかし、返って
きたきた返答は意外なものだった。

「レリックの反応は探知できませんでした」

「じゃあなんでガジェットがいるのかな？」

なのは疑問に思ったことを聞いてみた。

「現状ではなんにもわかりません」

「そう・・・」

「あともう一つ反応がありました」

「なんや？」

ガジェットとレリック以外の反応があるとしたら何があるかと考える三人は考えるが思いつかず尋ねる。

女性は落ちつた声で報告する。

「生命反応も多数反応ありました」

聞いた三人は暫らく硬直していたらしい。

「・・・ス」

真つ暗な闇の中、誰かの声が聞こえる。

「ラ・ス」

誰かの名前を呼んでいるようだ。

「プライス！」

呼ばれている気がする。

すると、真っ暗な闇が少しずつ白けて来た。

そして、真っ白に染まると引き上げられる感覚に襲われるのを最後に世界は暗くなる。

目を開けると目の前には、頭の髪の毛を真ん中だけ短く残してそれ以外は剃ったソフトモヒカンで、顔のラインに沿って無精髭が生えて、左目に額から頬まで縦に傷跡がある男が跨っており、右手に拳を握り振るかぶろうとしている、その後ろには青空があり左右には古いビルが立っている。

背中がひんやりと冷たく堅いことからコンクリと判断し、今は地面に寝ていると頭が理解すると同時に拳が振り下ろされる。

「起きろ、プライス!!」

「起きろ、プライス!!」

怒声と同時に左の脇腹に衝撃が走る。

「ガハッ!」

衝撃によって肺の中の空気が押し出される。

「お？ やっと起きたかプライス」

そう言つと体の上に跨っていた男が立ちあがり手を差し出す。

左の脇腹をさすりながら差し出された手を掴む。

「もつと優しい起こし方は無かったのか、ソープ？」

掴んだ手を引っぱりながら立つて周りを見渡す。

プライスが立っているのは、崩壊したビルや瓦礫が散乱する道路の真ん中にいた。

太陽が真上にいることから昼ぐらいだろうと思う。

ソープに顔を向けてさきほどの起こし方について批判しながら聞く。

質問を受けたソープは軽く笑って答える。

「これをされるよりましだろ？」

そう言つてソープは、マガジンや無線機が付いているベストからナイフを取り出し自分の首に軽く当てる。

当てるのを見てプライスは右手で額を押さえ、ため息をつく。

「まあ、味方に寝首を掻かれるよりはましだが、」

言葉を切り殴られた脇腹を摩る。

「年寄りには少しキツイものがある」

するとソープは小さく鼻で笑う。

「冗談を言うなプライス。シェパードとの殴り合いで死ななかつたくせに、たかが脇腹を一発殴られたぐらいで弱音を吐くなんて、明日は雪でも降るんじゃないか？それに・・・」

「それに？」

ソープはプライスの顔をジーと見つめて、確認したかのように頷いて口を開く。

「若くなってるように見えるぞ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？」

啞然とするプライスにソープは道路に散らばっているガラスから手のひらぐらいの破片を拾い、軽く拭いてプライスに渡す。

「自分の目で見たほうが早いだろう」

渡されたガラスを持って自分を見る。

そこに映っているのは、確かに若くなっている自分だ。白髪がほとんどだった髪と髭が真黒になっている。年齢的にいえば20代後半には若返っている。

「大丈夫か？」

啞然とするプライスに少し心配して声をかけるソーブだが返事は無く、プライスはガラスを見つめている。

「おい、プライスー？大丈夫か？」

プライスの前で手を振ってみるが反応がない。

しばらくじっとしていたソーブだが、いきなりプライスが持っていたガラスを引ったくり地面に叩きつける。

それでも動かないプライスにソーブは右手に拳を作りプライスの左脇腹を思いっきり殴ろうとするが、腕を掴まれ背負い投げのように投げられ背中を強く打つ。

「グッ！」

背中に強い痛みを感じるが投げ飛ばした奴に視線を向ける。視線の先には満足したかのような顔をしたプライスがいた。

「ふむ、見た目だけではないようだな」

そう言っつてプライスは掴んでいた腕を離す。

腕を放されたソーブはすぐに立ち服を数回たたき砂を落としプライスを睨む。

「確かめるならいきなり投げることは無いんじゃないか？」

「なら聞いたらやらせてくれたか？」

「その時は丁重にお断りする」

「だろ。だからいきなり投げたんだよ」

したり顔で見つめるプライスにソープは殺意に近い感情を抱く。

「ところで、おまえだけか？」

ソープの殺意を込めた視線を無視しつつプライスはソープに訊ねる。

そんなプライスにソープは諦めたかのようにため息を吐く。

「わからん」

「わからんだと？なぜだ？」

ソープの返答に若干声のトーンを落とす。

「なぜといわれてもな・・・」

言い淀むソープにいら立つプライス。

「なんだ？」

「・・・俺達以外にいるかわからん」

「・・・・・・・・・・・・・・・・俺“達”？」

「ああ俺“達”だ」

プライスはいら立ちを忘れてオウム返ししてしまう。

「他に誰がいるんだ？」

ソープはほほ笑んで答える。

「懐かしい連中だよ」

ビルとビルの上にポツカリとあるサッカーグラウンド二個あるかないかぐらいで地面に砂利が敷き詰められてる広場に、車両とヘリコプターが多数止まっている。

広場は後ろと左右をビルで囲まれ前には4車線の道があり、反対側にもビルが道に沿って立っている。

ソープはプライスを連れて広場に入る。

そこには激戦を戦い抜いた兵士がたくさんいた。

そして、なつかしい顔もたくさんあった。

「ギャズー!!」

初めて見つけたのはS A S時代に共に死線をくぐり抜けた仲間の名前を叫ぶ。

向こうも気づいたのかこっちに歩いて近づいてくる。

そして、軽い抱擁した後、面と向かって話し合う。

「プライス！ 元気そうだな！」

「お前も元気そうだなによりだよ。ギャズ」

「ハハ、まあな」

「他のみんなは？」

「すぐ来るだろうよ」

ギャズが言いきると同時に走ってくる三つの姿に気づく。

「プライス大尉ー！」

「おお、みんな無事だったか」

彼らは、かつてプライスが第22S、A / S連隊所属の小隊の隊長をしていた時の部下だった。

彼らもまた、プライスと共に死線をくぐり抜けた仲間なのだ。

プライスがかつての部下と話をしていると近づいてくる姿がある。それに気づいたプライスは無言のまま近づく。

「お前らもいたのか」

「それはこちらのセリフだぞ、プライス？」

灰色を基調とした戦闘服を着て蒼いサングラスをかけた男が皮肉をこめて返事をする。

プライスは立ち止まり前にいる三人の男を見る。

向かって右にるのが、さきほど返事をした男がいる。真ん中には、隣にいる男と同じ戦闘服をきた黒人が立っている。左には、緑を基調としたズボンを履き灰色の上着を着て、頭蓋骨がしるされたバラクラバをかぶり目を黒のサングラスで隠している男がいる。

プライスは右から順番に握手しながら話しかけていく。

「サンドマン、また会えてうれしいよ」

「ああ、俺もだ」

「フォーリー、懐かしな。いついらいだ？」

「お前のところとの合同訓練いらいだな」

「結構まえだな」

「そうだな。 お互い結構歳もとつたしな」

「それを言うな」

二人は小さく笑う。

「ゴーストは、あいからわずそれを付けてるんだな」

「これをはずしたら誰も俺と分かってくれないからな」

その瞬間、場が笑いに包まれる。

「プライス大尉ですね？」

談笑していたプライスに後ろから若い隊員が訊ねてくる。

プライスは振り向いて「ああ、そうだ」と答える。

「では本部に案内するのでついて来てください」

「久しぶりだな。プライス」

連れて来たところには一機の^{ブラックホーク}BHが停められておりそこには、戦闘服を着た初老の男が後ろに手を組み仁王立ちしている。

周りでは何機ものヘリが空に向かって次々と飛び立っていく。

初老の男に向かってプライスはため息をつき右手で頭を押さえ視線を落とす。

「あんたには会わないと思っていたよ」

そして視線を初老の男に向ける。

「マクミラン大尉、それともベースプレートとでも呼ぼうか？
司令官殿」

目覚めと集結（後書き）

今回は、ローチ・ラミレス・フロスト・ユーリは出ませんでした。が近いうちに出す予定です。

ご意見・ご感想・改良点ありましたらお願いします。
次回は武装設定になります。

武装設定（前書き）

大まかな登場人数と使用する銃火器と車両・航空機です。

武装設定

人員確認

SAS

ギャズほか3名 計4名

TF141

ゴースト・ローチほか12名 計14名

レンジャー

フォーリー・ラミレス・ダンほか6名 計9名

デルタフォース

サンドマン・フロスト他ほか2名

グラニットチーム4名

オニキスチーム4名 計12名

プライス・ソープ・ユーリ

マクミラン

合計48名

使用武器

アサルトライフル

・M4A1

M203グレネードランチャー

M26 ショットガン

レーザーサイト（可視・不可視）

ホログラムサイト

ACOG

フォアグリップ

・ACR

M203 グレネードランチャー

レーザーサイト（可視・不可視）

ホログラムサイト

・SCAR-L

M203 グレネードランチャー

M26 ショットガン

レーザーサイト（可視・不可視）

ホログラムサイト

共通して5.56mm弾を使用。

M4A1はデルタフォースとSASが使用。

ACRはTF141が使用。

SCAR-Lはレンジャーが使用。

サブマシンガン

・MP5

サイレンサー

レッドドットサイト

・UMP45

サイレンサー

レッドドットサイト

MP5は9.19mm弾

UMP45は・45ACP弾をそれぞれ使用。

軽機関銃

・M240

グリップ

ホログラムサイト

・ミニミ

グリップ

ホログラムサイト

スナイパーライフル

・バレットM82A1

サーマルサイト

フルメタルジャケット(FMJ)

・M14 EBR

サイレンサー

サーマルサイト

フルメタルジャケット(FMJ)

・L118A

サーマルサイト

フルメタルジャケット(FMJ)

ショットガン

・M1014

グリップ

レッドドットサイト

・SPAS-12

グリップ

レッドドットサイト

共通して12ゲージを使用。

ハンドガン

- ・M9

- ・USP・45

サイレンサー

タクティカルナイフ

- ・M1911・45

タクティカルナイフ

- ・マグナム・44口径

M9はレンジャーとTF・デルタフォース・ソープが使用。
USP・45はSASが使用。

M1911・45はプライスだけが使用。

マグナムはマクミランだけが使用。

ランチャー

- ・ジャベリン

- ・ステインガー

- ・SAMW

その他

- ・M134 ミニガン

- ・M-5自動機銃

- ・ブローリング M-2

- ・MK-19

車両

- ・ハンヴィー 4台

武装 M134ミニガン

・ストライカー装甲車 2台

ライン隊 ライン 1・2

武装 ブローリング M-2

航空機

・リトルバード 4機

キラ隊 キラー 1-1・1-2

サンダー隊 サンダー 2-1・2-2

武装 M134ミニガン ロケットポット

・ブラックホーク 4機

ナイト隊 ナイト 1・2・3

武装 M134ミニガン

指揮官機 ベースプレート(武装無し)

・オスプレイ 2機

ラプター ・ピクシー

各機にパイロットが2名

合計24名

24+48=72名

武装設定（後書き）

ご意見・ご感想・改良点ありましたらお願いします。

これは現段階で出すものですので話が進むにつれて新しいのを出す
かもしれません。

また、原則としてMWシリーズのキャンペーンから出しています。

出撃と把握（前書き）

第3話始まります。

出撃と把握

『生命反応も多数ありました』

なのはは薄暗いヘリの中でイスに座りさつきシャーリーの報告を受けた時の事を思い出していた。

シャーリーからの報告を受けた3人は暫らく硬直していたが、リンによって硬直が解ける。

そして、はやてはすぐにパイロットのヴァイスにヘリの準備をするように伝える。また、二人に救助に行くことを命令する。

なのはとフェイトは真剣な顔で頷き部屋から出る。

なのははティアナ達に午後の訓練は中止で自主練習しているように伝え、理由も伝える。

そして、屋上で待機していたヘリにフェイトと共に乗り込んだ。

しかしここで問題が起きる。

さつき自主練習しておくように伝えたティアナとスバル、エリオとキャラがヘリのイスに座っていたのだ。

「あと25分ほどで目標地点の空域に入る」

操縦席にいるヴァイスの通信になのは「了解」と相槌を打ち反対側のイスに座っている4人を見つめる。

4人が付いて行きたい理由は、なのはとフェイトの戦闘を近くで見たいとのこと。

当然、フェイトは危険だと思い却下するがティアナ達は食い下がる。

その時なのははと言おうか悩んでいたが、はやてに連絡し相談するがはやてもどうするかなやんでいた。

しかし、話を聞いていたヴァイスが「見ることも練習のうち」と言っただけ、なのはは少し考えて許可したのだ。

フェイトとはやては驚き、フェイトはなのはを見るがなのはは、顔の前で手を合わせて謝る。

理由を聞いたフェイトは肩をすくめ、条件付きで許したのだ。

二人の様子を画面越しに見ていたはやても正式に許可を出したのだ。

「なのはさん、どうかしましたか？」

なのはから見て左から2番目に座っているスバルが心配そうな目で見ている。

気がつけばティアナとキヤロ、エリオとそして、なのはの右に座っているフェイトも見えていた。

なのははあわてて笑顔を作り笑ってごまかす。

スバル達は納得しきらない様子だがとりあえず了解したようだ。

そんな時にシャーリーから連絡が来る。

「現地の事で分かった事の報告よろしいですか？」

なのはとフェイトは真剣な表情に変わり、ティアナ達の表情も変わった。

「うん、お願い」

「分かりました。まずガジェットのことですが、タイプは？型で、数は20体ほど反応がありいくつかのグループに分かれて動いていますが、特に何かを探している様子ではありませんね」

「どうして？」

スバルが間の抜けた質問をしてティアナに頬を抓られ怒られてる。そんなスバルとティアナを見てなのはも同じ疑問を抱く。

「でも、どうしてわかったの？」となのはが聞くと、

「最初はわからなかったのですが、よく見るとそれぞれのグルーブが違うところぐるぐる回っているだけでしたので、何かを探しているとは思わなかっただけです」

「なるほどね。もう一つの反応はどうなってるの？」

なのははこの出勤の理由にもある多数の生命反応について聞いてみた。

「はい。そちらは数でいえば70前後はあります」

「『『『『『70!!!?』『』『』『』』」

かなりの大人数に驚く一同だがシャーリーの報告はまだあるようだ。

「後問題があります」

かなりの人数におどろいた一同だがあと二つもあるらしく、困惑するティアナたちに対してなのはとフェイトは最初は驚いたもののすぐに切り替えて問題を聞くとすぐに答えた。

「接触の可能性が高くなったことです」

「それじゃ、初めは可能性が低かったのかな？」

聞いたのはなのはだ。

「そうですね。0%では無かったと思いますが限りなく低いと判断しました」

「理由はなんですか？」

今度聞いたのは、なんとか戻ってきたティアナだ。

「それは、生命反応が一か所に集まっていて一番近いガジェット
のグループとは直線距離で約20?ほど離れていたからです」

「ならどうして高くなったの？」

次に聞いたのはフェイトだ。

「それについてはこれを見てください」

そう言うときシャーリーが映っていたディスプレイの横にもう一つ
ディスプレイが現れる。

「ヘリコプターみたいですね」

エリオがディスプレイに写っている2つの機体に思ったこと言う。

「エリオ君、正解だよ。この2つを調べてみたらどちらも第9

「管理外世界、分かりやすく言えばなのはさん達がいた世界のヘリコプターに良く似ていることがわかったの」

「わたしたちの？」

「はい」

「この2つと接触の可能性がどうかしたのですか？」

スバルが聞く。

「今この機体が現地で7機飛んでいるのよ」

シャーリーの言葉に理解したのはなのはとフェイトそしてティアナの三人で残りのスバルとエリオ、キャラは首をかしげて頭の上には？を浮かべている。

そんな3人を見てなのはとフェイトは苦笑いを浮かべ、ティアナはため息をつきながらも説明する。

「今から説明するから良く聞きなさいよ」

そして、3人は顔をティアナの方に向ける。

「分かりやすく言うと、ガジェットがヘリに気づいて攻撃する可能性が高い、ということよ」

「そして、生命反応のところに行く可能性もある」

ティアナの説明に続いてなのはも付け加える。

するとキャラが控えめに手を上げて質問する。

「要するに、怪我する人がたくさん出ることですか？」

「多分、そうなるだろうね」

フェイトが答えるとスバルがいきなり立ち上がる。

「なら急がないと！」

なのはは「うん」と答えてヴァイスに急ぐように連絡する。

「これに目を通しておいでくれ」

久しぶりに会ったかつての上官はBHの中に入っブラックホークてすぐに出てきて一枚の紙を渡して来た。

プライスが「これは？」と聞くと、マクミランは「ここにある戦力の一覧だ」と答える。

そこには、武器と車両、航空機が書かれていた。

一通り目を通したプライスは紙を返す。

「さっき飛んで行ったBHとRBはどこリトルバードに行ったんだ？」

プライスはさっき飛んで行ったヘリについて聞いてみる。

「周辺の偵察と他に誰かいないか搜索に出した」

「そいつとあれは？」

プライスはマクミランの後ろにあるBHと2機のオスプレイについて聞く。

「あれは出す必要性が無いと判断したまでだ。それとそいつは、EUH-60Lと言うBHでな、指揮と統制システムを搭載した機体だから動かさないだけだ」

「動かせないのか？」

「いや、動かせるが必要性が無いのと、ここにいる方がこっちの指揮がしやすいからな」

「なるほど」

マクミランの説明が終わったところでプライスは周りを見渡す。

周りでは兵士たちが武器と車両の点検と整備をしている。

(ん?.....!)

しかし、プライスはその動作に違和感を感じて少し見てそして気付く。

「少し聞きたいことがあるんだが聞いてもいいか？」

マクミランは疑問に思いながらも「かまわない」と返事をする。

「.....ここにいる皆はなぜここにいるか分かっているのか？」

マクミランはプライスの見つめる先を見て納得するかのように頷き答える。

「皆、同じ夢を見たんだよ」

「どんな夢を？」

プライスは顔をマクミランに向けて聞き返す。

「お前が白い老人と話してる夢をな」

「……なるほど」

プライスは相槌を打ちながら心の中で（あのオヤジ、やってくれるな）と軽く笑う。

「ということは、全員参加でいいんだな？」

「だろうな」

「そうか……」

プライスはさっき目を通した紙の内容を思い出しす。

「優秀な指揮官に優秀な兵士達だけでも心強いのに、ヘリと車に武器がたくさんあるからな、どんな奴に協力するか分からんが、負ける気はしないな」

マクミランは頷く。

そんなマクミランを見てプライスは「しかし」と続ける。

「しかし、弾薬と燃料の補給が無いのはきついな」

「弾薬については大丈夫だ。ついて来い」

そう言って連れてこられたところには深緑色の箱がいくつかあり、箱にはAMMOと書かれていた。

「弾薬？」

書かれているのを訳したプライスはマクミランに聞く。

「まあ、待て。こいつは説明するより見せる方が早いからな」

そう言ってマクミランは自分のマグナムを手にして弾を全部取ってプライスに渡す。

「こいつの半径2mぐらいの範囲に入って《チャージ》て言ったら弾が自動で補給できるんだよ」

そして、箱に近づき小さい声でチャージと呟く。

すると、マクミランの持っているマグナムが少し光って戻る。

プライスはマグナムがいきなり光った事に驚く。

そんなプライスにマクミランは近づいてマグナムを渡す。

右手に渡されたマグナムを見てプライスは驚愕する。

マグナムの弾が全部装填されていたからだ。

左手にはさっき渡された弾が全部あるの確認してマクミランを見

る。

「理由は聞くなよ？」

「なぜだ？」

「調べようにもそんな設備が無いし、それに・・・」

「それに？」

「これも魔法の力だと俺は思うがな」

「・・・・・・・・」

マクミランの言った言葉に少し固まったがすぐに治りため息をつく。

「どうした？ため息ついて」

「・・・いや、ほんとにファンタジーだなと」

マクミランは「ああ、そうだな」と相槌をうつ。

「司令官!」

こっちにソープが走ってくる。

「どうした、マクダビツシュ大尉?」

息を整えてから、ソープは報告する。

「偵察に出たヘリの数機が正体不明の物体を発見し、観察していたところ攻撃されました」

出撃と把握（後書き）

ご意見・ご感想・改良点ありましたらお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0525ba/>

魔法の世界で守る者

2012年1月14日20時58分発行